

浄土教と彫刻

礪波 恵 昭

今日は『浄土教と彫刻』というタイトルでお話をさせて頂きます。浄土教、この真宗大谷派も広い意味で浄土教の中の一つの流れをくむということになりますけれども、日本において浄土教に関わる美術、彫刻の歴史を、飛鳥時代・七世紀から鎌倉時代・十三世紀まで、重要な作品、興味深いポイントを歴史的に辿って紹介していく、そのように考えています。あわせて、浄土教の彫刻というものが、日本の仏教、あるいは人々にどのようなことをもたらしたのか、それから、人々がどういうことを考えていたのか。そういうことまで考えを巡らせてもらえる機会になったら良いのではないかと考えています。それでは早速、スライドを映していきたいと思えます。

浄土教というと、浄土に憧れるということが基本になってます。その際の浄土というのは、いくつかの浄土がありますが、日本の場合は極楽浄土に最終的に集約されていきま

す。弥勒の兜率天浄土も結構重要だったりしましたが、最終的に鎌倉時代以降は阿弥陀如来の極楽浄土が、一番、“浄土に憧れる”時の浄土の代表的なものということになってくるわけです。その際に、極楽浄土の教主というのは阿弥陀如来です。その阿弥陀如来を実際に造形として、彫刻、絵画で表現されたものを紹介していきます。

今、映しているのは元々は奈良の法隆寺に伝わり、現在は東京国立博物館の所蔵になっている『阿弥陀三尊像』という仏像です。これは日本に残っている一番古い阿弥陀如来像です。阿弥陀三尊は、阿弥陀如来を中心に、その両側に観音菩薩と勢至菩薩が従うという形式になるのが通常です。これもそうなのですが、真ん中が如来という種類の仏さんであるということは観音菩薩、こちらが勢至菩薩です。真ん中が如来という種類の仏さんであるということは明かんですが、それは頭髮が粒を並べたような螺髪らほつになってますし、着ている衣も如来の袈裟を着けているからです。でも、この仏像は手の構えだけを見たら、阿弥陀如来か、薬師如来か、釈迦如来か、弥勒如来か、全く区別が出来ないのです。どこで区別するか。これは、両側きょうじに脇侍きょうじの菩薩二体がお供しますが、お供の菩薩の冠を見て欲しいんです。向かって右、観音菩薩の宝冠には小さい仏像が表されています。勢至菩薩は花瓶みたいな、水瓶すいびょうというものを表しています。小さい仏像がついていたら観音菩薩、花瓶のような

浄土教と彫刻

水瓶がついていたら勢至菩薩になります。観音菩薩と勢至菩薩は必ず阿弥陀如来のお供につくということが決まっていますから、真ん中の如来が見分けがつかなくても、両側が観音菩薩と勢至菩薩なら真ん中が阿弥陀如来ということになります。この仏像の顔は少し童顔になってますけれども、これから考えておそらく七世紀の半ばくらい、西暦六〇〇年代の半ば頃の制作だと考えられる仏像です。これが日本に残っている阿弥陀如来の中で一番古いものということになります。

日本の仏教というのはいろんな説がありますが、おおよそ六世紀、つまり西暦五〇〇年代に日本に伝わって来て、西暦六〇〇年前後から本格的にお寺の造営が始まります。奈良県の飛鳥寺というお寺が日本で最初の本格的寺院で、西暦六〇〇年前後の造営です。その頃から日本で仏教信仰が広まり、仏教寺院が造られていくのですが、その過程のわりと早い時期に阿弥陀如来像が造られていたということが今示しました仏像で分かります。ただし、この頃は阿弥陀如来と薬師如来、弥勒如来、釈迦如来などの区別はすごく曖昧でした。阿弥陀如来は極楽浄土の教主で我々の来世を救ってくれる仏です。つまり死後、極楽浄土へ救ってくれる仏です。一方、薬師如来はいわゆる現世利益の仏で、今生きている現世で薬の働きで病気を治し寿命を延ばしてくれます。そうした仏のはたらきの違いがまだ

理解されていない時期でした。例えば、法隆寺に西暦六二三年（推古天皇三十一年）に造られた釈迦如来像があります。その像の銘文には釈迦如来に「聖徳太子一族の死後の安楽を祈願する」と書いてあります。お釈迦さんが死後の世界を救ってくれるっていうことになってたりするので、実はこういうふうな仏像の姿はちゃんと造られているんだけれども、如来ごとに教えが違う、救いの内容が違うみたいなのはまだまだ明確ではなかった。しかし、形はきちんと造ってあります。何でか。これはお手本になった仏像が、中国大陸、朝鮮半島から日本へ持ってこられて、それをお手本に造ってるから形は間違いなく造られているのです。しかし教えの内容というのはまだまだはつきりしていない段階の阿弥陀如来像がこの作品ということになります。これは彫刻ですが、絵画でも阿弥陀如来を主題にしたものは東アジア地域の仏教美術の中でかなりの部分を占めています。

次に紹介するのは中国・敦煌石窟の壁画の一部です。『阿弥陀浄土図』という画ですが、真ん中が阿弥陀如来、左右に観音菩薩、勢至菩薩。阿弥陀三尊を中心に、阿弥陀如来の極楽浄土の光景を、主に『観無量寿経』というお経を中心に絵画化したものが、中国では広く仏教美術の主題としてとり入れられていました。それが日本にも影響を与えた例が奈良の法隆寺金堂壁画画です。残念ながら、この金堂壁画のオリジナルは火事で焼けてしまいま

浄土教と彫刻

したが、これは焼ける前に撮られたカラー写真です。これを見ると、真ん中が阿弥陀如来で両側が観音菩薩、勢至菩薩。そしてその上には天蓋という、阿弥陀如来の上にさしかける傘みたいなものが表してあって、極楽浄土の一部を切り取った構図になっているものです。これは七世紀の後半の制作です。この手の構えを見て欲しいのですが、胸の前で説法印あるいは転法輪印という手の構えをしています。これも日本の仏教美術の黎明期に画かれているということになります。法隆寺の壁画は他にも、お釈迦さんの浄土が描いてあったり、弥勒の浄土が描いてあったり、薬師如来の浄土が描いてあったり、複数の浄土が描かれていてます。だから阿弥陀浄土に特別に焦点が当てられていたというわけではない、ということになります。

押出仏の阿弥陀三尊像も造られました。元は奈良の法隆寺に伝わり、明治になってから皇室に献上されて、現在東京国立博物館に所蔵されているもので、薄い銅板を焼きなまし型に押し当てることで仏像の姿を写し取ったものがこの押出仏というものです。これは大量生産ができますから、お堂の中の壁や仏壇の下の腰板部分に貼ったりして装飾したと考えられるものです。中央が阿弥陀如来で、左右に観音菩薩、勢至菩薩を表しています。造られたのは七世紀の終わり頃から八世紀にかけてと考えられますが、これまで紹介しましたと

おり阿弥陀如来をモチーフにした仏教美術作品は、日本の仏教美術の黎明期からそこそこ数としては見つかっているということになります。これは他のお釈迦さんとか観音菩薩と同じぐらい作品数はあるということです。ただし、阿弥陀如来の極楽浄土に生まれ変わりたいという考え方がその根底にあったかどうかは、先ほど申し上げたようにかなり曖昧であったと考えられるのですが、実際の作品としてはこうしていくつか残されているので

す。

この頃の阿弥陀浄土、阿弥陀如来の作品の白眉と言えるのが、法隆寺に伝わっている『伝橋夫人念持仏』と言われるものです。これは、下方に木製の台座があり、上部には木製の屋根を備え、中央部には扉があり、その中に比較的小型のブロンズ（銅造）の阿弥陀三尊像が安置されています。この扉は他の部分より後に造られたものですが、今で言うところのお仏壇みたいなものと理解してもらって結構です。小型のもので、大きなお寺に置いてみんなで拝むものではなくて、貴顕が身近に置いて毎朝毎晩この仏さんの前で拝んでいた、そういうものだと言えます。これは、奈良時代に各地に国分寺・国分尼寺を発願された、仏教の力で日本の国を治めていこうと考えた聖武天皇のお後の光明皇后の母である、橋三千代が日頃この仏像を拝んでいたということで『橋夫人念持仏』という愛称

浄土教と彫刻

がついています。

中央部には阿弥陀如来、左右に観音菩薩、勢至菩薩、後ろには光背状の後屏があり、阿弥陀三尊像の下には三尊を支える台盤という構成になっています。この三尊像の可愛らしい柔和な笑みを湛えるような顔で少し子どもっぽい体型の仏像は、七世紀後半、白鳳時代とか白鳳期と呼ばれる時代の特色です。小さい阿弥陀如来の化仏を宝冠正面につけたのが観音菩薩、水瓶を宝冠に表したのが勢至菩薩ということになります。この阿弥陀三尊は何が素晴らしいかというと、後ろの光背状の後屏とか台盤と言われる部分も含めた全体の構成です。台盤から阿弥陀三尊像の台座が上に立ち上がって、その上に三尊がいます。台盤に三つ穴があり、この上の阿弥陀三尊の蓮台という台座の下の茎が差し込まれています。この台盤は蓮の池を表しています。蓮の花だったり、横向きになった葉だったり、巻いた葉だったり、開いた葉だったりいろいろと表されますが、蓮の葉が生えている池にさざ波が立っています。そこからこの阿弥陀三尊の蓮の花をかたどった台座が立ち上がって、その上に阿弥陀三尊がいるという構成になっています。極楽浄土には池があると阿弥陀経などの經典にも書いてありますけれども、それをまさに表現してあるわけです。これらは現在銅の錆びである緑青ろくしょうがふいているので緑色ですが、元々は全面に鍍金(金メッキ)が施

してありましたから、非常に華やかなものだったはずです。そこから立ち上がった阿弥陀三尊の後ろには後屏と呼ばれる光背があります。ここには五人の天人が浮き彫りになっています。真ん中の三人の天人は手を差し出して、その前に取り付けられている阿弥陀如来の透かし彫りのきれいな頭光ずこうを支えるようにデザインされています。これらはすべて銅を鑄型に入れてかたち造る鑄造という技法で作られています。鑄造技術も見事です。天人の下に不思議な蛸の足みたいな植物が絡み合い、これが全部下の方に束ねて蓮の池に繋がっています。後屏の支柱も植物の茎を束ねたように表されています。このように、極楽浄土にある宝池、蓮が生えている池を一つの基盤として、そこから蓮の花や植物が生え、蓮の花の上には阿弥陀三尊がいる。そして後屏の天人もそこから上に生えた所に表されるというように、極楽浄土とそこにある蓮池をモチーフにしてデザインを展開させた作品として、同時代には類例がない極めて特異かつ非常にレベルの高い作品ということができまです。ですから、これを造った人はお経の内容を理解して制作しているということがわかります。極楽浄土には池があって、そこに蓮の花が生えていて、その上に阿弥陀如来がいます。そのことまで知った上で作れない。だからこれを制作した人の阿弥陀如来と極楽浄土に関する理解はかなり深かったということが分かります。これはこの時代には空前

浄土教と彫刻

絶後と言える作品で、蓮池をモチーフにして全体を構成したデザイン性も、非常に薄く見事な透かし彫りの光背を鑄造した技術もすばらしいものです。おそらくこれは中国大陸から朝鮮半島から日本に渡来した人が指導をして造らせたもので、教義的な部分も渡来してきたお坊さんの指導によるという可能性が高い、と私は考えています。これは七世紀から八世紀における日本の浄土教美術の中では特に進んだ段階の作品で、日本の他のものと関連づけるのは難しいくらいです。法隆寺に行かれたらぜひ見てください。その下の木製の台座の部分にもやはり極楽浄土に関わるモチーフが描かれています。台座正面には供養をすめる人が二人、裏側には蓮華化生と言って、極楽浄土に亡くなった人が生まれかわる際に宝池から生えた蓮花の上に生まれかわる場面が描かれています。このように、阿弥陀如来を説いたお経をよく読み込んで、そのモチーフを美術に採り入れた、本当にこの時代としては希有な作品ということで紹介しておきたいと思います。おそらく西暦七〇〇年前後、奈良時代の直前ぐらいの制作だと思います。その構想力にしても、鑄造の技術にしても、この時期としては極めて卓越したものだと言えます。

奈良時代に入っても阿弥陀如来像は引き続き造られています。法隆寺伝法堂に安置される阿弥陀三尊像がその一例で、真ん中の阿弥陀如来は先ほど申しましたように、説法印あ

るいは転法輪印という、胸の前で腕を構える構えです。ただ、この奈良時代に阿弥陀如来が造られる理由は、極楽浄土に生まれ変わりたいと祈願する、後の浄土教的な考え方で造られているものではなくて、悔過けかということに基づいていると考えられます。悔過とは、いわゆる「懺悔」のことで、仏教語では懺悔ざんげと言うのですが、これは、当時の為政者などが、何か悪いことが起こった時にそれと何か解消しようと、仏の前で行う懺悔滅罪の法要です。その時の本尊として阿弥陀如来が選ばれることがあります。ですから、極楽浄土に生まれ変わりたいという、後の時代のいわゆる浄土教的な考えで造られたものではない可能性が高いのです。阿弥陀如来は阿弥陀如来なのですが、極楽浄土に死んだ後生まれ変わるその世界を意識して造ったものではない。そういうふうに見えるものが奈良時代の阿弥陀如来像には結構あります。

彫刻ではないのですが、奈良時代の阿弥陀如来および極楽浄土を表した作品として欠かさないのは、奈良県にある當麻寺『観無量寿経变相図』。一般には『當麻曼荼羅』として知られている作品です。これは、オリジナルは綴れ織りという染織作品、織物です。縦横四メートル四方ほどある大きなもので、今年の春に奈良国立博物館で『當麻寺展』があつて、ここで二十年ぶりぐらいに原本が公開されました。原本は傷みが激しく当初の部分

浄土教と彫刻

あまり残っていないのですが、この図様を室町時代に絵画として描いたものを見てみましょう。『観無量寿経变相図』とは、真宗大谷派でも所依の經典として『浄土三部経』の一つ、『観無量寿経』の中に説かれている世界を絵画化したものです。右辺は阿弥陀如来を心に思い浮かべる、観想するにはどうしたらいいかということを描いてあります。左辺は『観無量寿経』が説かれるに至った阿闍世王の話が描いてあります。一番下の所は九品くほん来迎らいごうと言って、これは最後の話とまた関わりますけれども、「人は生前の行いの善し悪しによって往生の仕方が九段階に分かれる」とされているのを図様化してあります。これももっと細かい所を映したら面白いのですが、今日は彫刻ということですし時間もありませんので省略しますが、普段から良い行いをしている人は、「上品じょうほん 上生じょうじやう」という所に位置づけられて、死んだらすぐに阿弥陀如来がお供に二十五菩薩を連れて雲に乗って亡くなった人の元にやってくる。そしてすぐその人の魂を迎え取って、極楽浄土に帰って行って、その魂がこの宝池に生まれ変わることができるとされています。これは生前の行いがだんだん悪くなってくると、「上品上生」から「上品中生」「上品下生」「中品上生」「中品中生」「中品下生」となって、お供の数が減ってきます。だんだん寂しいお迎えになってくるのです。一番下「下品下生」。これは要するに、普段から極悪非道で、仏像を壊して薪

にして売ったり、お坊さんを捕まえて何か物を盗んだりとか、そういう極悪人でも死ぬ間に改心したら何とか救われますよということが描いてあります。この人は残念ながら阿彌陀如来は来てくれず、魂を乗せる台だけが飛んできます。また亡くなった「下品下生」の人は、生まれ変わるのもかなり時間が経ってからしか生まれ変われないことになっています。そして中央部は阿彌陀如来がいる極楽浄土の様子を『観無量寿経』を元に絵画化してあります。阿彌陀如来、観音菩薩、勢至菩薩、後ろには極楽浄土の楼閣が展開し、手前には能舞台のような造り出しがあり、そのまわりに蓮の池があります。この頃の中国では極楽浄土を絵画化する、「変相図」、「変」というのが流行したのですが、そうした変相図と比べても當麻曼荼羅の構成は最も精緻なものの一つだと言えると思います。この原本は織物で作られているのですけれども、四メートル四方もある巨大な織物は奈良時代の日本では作れないと考えられています。中国の唐で、それも相当の年月をかけて作られたものが遣唐使によって日本にもたらされて、それが當麻寺に収められたと考えられます。それが後に傷んだので、こういうふうには絵画化したものが作られた訳です。この図様を元に小型にしたものが流布して、結構色んなお寺に當麻曼荼羅というのがあります。その一番原本がこれなのです。だから、こういう「極楽浄土はこんなすばらしい世界ですよ」と具

浄土教と彫刻

体的に示した美術作品が奈良時代には日本にもたらされていたということも確かです。ただ、それがどういうふうにも受容されて信仰されていたかということはまだまだ分からないところも多いのですけれども。

平安時代に入ると阿弥陀如来や浄土教に関わる新しい要素が中国から日本に入ってきました。一つは真言密教が中国から日本にもたらされたということです。平安時代に入ってから後に空海と最澄が中国へ遣唐使として派遣されます。二人は八〇四年(延暦二三年)に入唐し、最澄は翌八〇五年に日本へ帰り比叡山延暦寺を開き、天台宗を広めていきます。空海は八〇六年に日本に帰ってきて、和歌山県高野山の金剛峰寺、それから京都の東寺を拠点に真言宗、真言密教を広めていきました。この二つの新しい仏教の流派が日本に伝えられると共に、仏教美術にも大きな変化があります。

その一つが空海が日本に伝えた真言密教、真言宗に関わる仏像です。

東寺の講堂に残されている仏像群は八三九年(承和六年)に開眼供養された現存する日本最古の真言密教の尊像です。例えば不動明王に代表される明王像というのは真言密教の中で初めて作られた仏像で、空海が日本に真言密教を伝える以前は日本にはなかったものです。こうした真言密教の仏像の中にやはり阿弥陀如来も含まれています。東寺講堂の中

央にある五智如来（五仏）の真ん中は大日如来で、これは真言密教・密教世界の最高の存在、あらゆるものを統括する仏ですが、その周りの四体の如来のうち一体が阿弥陀如来・無量寿如来です。この真言密教の中で作られた阿弥陀如来・無量寿如来というのはお腹の前で両手を組み合わせた阿弥陀の定印という印相で、この新たな阿弥陀如来の姿が真言密教の将来とともに日本でも造られるようになりました。ちなみにこの真言密教ではそれまでにない非常に多くの仏が登場し、それらを描いたものが曼荼羅です。先ほどの當麻曼荼羅も曼荼羅と呼んでいますが、これは本来は浄土変相図であり曼荼羅と呼ぶのはおかしくて、曼荼羅というのは密教の仏を多数描いたものです。そのうち胎藏曼荼羅は大日如来を中心に多数の仏が描かれており、大日如来の下に無量寿如来・阿弥陀如来が描かれています。このお腹の前で両手を組み合わせる阿弥陀の定印の仏像が日本では後にかなり流行しますが、起源はこの密教の中の阿弥陀如来の姿であるということになります。

真言密教の教えに基づいて大日如来を中心に五体の如来、すなわち五智如来（五仏）の他の例として京都・山科の安祥寺にある五智如来像があります。その中の一体が阿弥陀如来です。このような定印の阿弥陀如来は、大日如来を中心に五体一組で造られるのが本来の密教の中の阿弥陀如来・無量寿如来なのですが、それが独立して阿弥陀三尊の中に取り

浄土教と彫刻

込まれた作品も制作されました。八八八年（仁和四年）に造られた京都・仁和寺の阿弥陀三尊像です。この手の構えが密教式の定印です。しかし両脇侍の観音菩薩、勢至菩薩は密教式ではありません。密教式の阿弥陀如来が阿弥陀三尊の中尊から徐々に広まってきたことがわかります。さらに、清涼寺には八九六年（寛平八年）に造られた阿弥陀三尊像が伝わりますが、これもやはりお腹の前で両手を組み合わせる阿弥陀の定印をしています。両側の観音菩薩、勢至菩薩も不思議な手の構えをしているのですが、これは話をしていると時間が長くなるので省略をします。そしてこのお腹の前で両手を組み合わせる密教式の阿弥陀如来はさらに日本中に普及をしていくこととなります。岩船寺阿弥陀如来像は九四六年（天慶九年）に造られた仏像ですが、これも阿弥陀の定印です。

ここまで平安時代前期の真言密教の話をしました。一方、比叡山延暦寺の最澄が日本に伝えた天台宗の中でも密教を広めようとする動きが出てきて、最澄のお弟子さんたちが中国に留学し、空海の真言宗に負けないよう、新たな天台密教を日本に伝えました。その中に円仁というお坊さんがいます。円仁は常行三昧という修行を日本に伝えました。これは阿弥陀如来をお堂の真ん中に祀って、その周りをお経などを唱えながら絶えず回りながら修行するというものです。その際の本尊にはいくつかの姿があるのですが、いずれも

両手をお腹の前で組み合わせる定印であるものの、今まで見てきた阿弥陀如来の頭の螺髪という巻き髪を並べるものと違い、髪のを伸ばした菩薩と同じ髪型で、宝冠をかぶっていました。阿弥陀如来が宝冠をかぶるのは珍しいのですが、常行三昧の本尊には、特殊な宝冠阿弥陀といわれる冠をかぶった阿弥陀如来が祀られた可能性が高いと考えられています。ここはまだ研究が進んでいなくてよく分からないところも多いのですが、我々が通常目にする阿弥陀如来とは違った姿の阿弥陀如来が常行三昧の本尊だったらしいです。螺髪の上に宝冠をかぶった非常に特殊な姿の阿弥陀如来も造られました。おそらくこれも常行三昧の本尊として造られたものと考えられています。

平安時代後期には、日本の仏教の中で一つの大きな転換点になる出来事である、末法の時代の到来ということが重要です。仏教全般でもそうですけれども、仏教美術にとっても末法時代の到来というのは大きな変革をもたらしました。釈尊が仏教を説かれて以降、どのように伝わり広まっていくかを三つの時代に分けて区分する三時説という考えがあります。「正法・像法・末法」と、時代を経るにつれてお釈迦さんの教えはだんだん正しく伝わらなくなると考えられています。日本ではその末法の時代に一〇五二年（永承七年）に入ると信じられていました。末法の時代に入ったら、お釈迦さんの教えに従って修行をし

浄土教と彫刻

でも悟りに至ることは難しいし、それどころか、戦乱であるとか、天変地異が続いて世の中乱れて、本当のこの世の中で生きていくことすら難しい時代になってしまおうとされています。ですから、末法の時代が到来するというのを、その時代が近づいてきた時の人々は非常に恐れ、どうしたらいいかということを人々は考えました。その代表的な人物として、真宗大谷派でも大変大事な七高僧の一人、恵心僧都・源信という方がいらっしゃいます。比叡山横川にいらっしゃったお坊さんですけれども、この源信が、九八五年（寛和元年）に『往生要集』という本を纏めました。これは非常に重要な本で、仏教美術の世界にも多大な影響を与えた本です。これは、往生するために肝要な点・重要な所を集めた本ということで、いろんなお経やお経の解説書から、簡単に言うとお経の極楽浄土、阿弥陀如来に救ってもらい極楽往生するためにはどうしたら良いかということをお経から抜粋してまとめた本です。二部構成になっていて、前半は地獄がいかにも恐ろしいか。「何もしなかつたら地獄に落ちますよ」と。だから「地獄がどんな怖い所か、それを見て、地獄に落ちないように仏道修行しなさい」ということですが、地獄の光景の恐ろしさは前半に書いてあります。後半には、阿弥陀如来に救ってもらい極楽往生するためには何をしたら良いかということが書いてあります。前半の部分、地獄の光景が書いてある箇所は、仏教美術の中の地獄絵の

成立につながりました。昔はお盆の頃になったらお寺で地獄の画を出してみんなに見せて
 絵解きしていたのですが、地獄絵・地獄図が日本で展開していく基礎になったのがこの
 『往生要集』だと考えられています。一方で、『往生要集』後半部分の極楽浄土に往生する
 にはどうしたらいいかという箇所も仏教美術に大きな影響を与えました。恵心僧都・源信
 の時代の浄土教は、基本的には貴族のための教えという側面が否定できず、一般庶民のこ
 とはまだあまり考えてないのでしょうけれども、日頃から「作善さぜん」という、善行を重ねて
 おくことが重要であると書いてあります。そして臨終の時には、周りの者が一緒に念仏を
 して、極楽浄土に迎え取ってもらえるようにしなさいということが書いてあります。この
 うち、極楽に救ってもらえるには日頃できるだけ作善を重ねておくことが良いということ
 が貴族に注目されました。具体的にはお寺に寄進するとか、あるいはさらに、お寺を建て
 てしまう、お堂を造る、仏像を造る、仏画を造る、豪華な青い紙に金で経文を写経するな
 ど。こうした作善を積みかさねることによって極楽浄土に生まれ変われる確率が高くなる
 と信じられました。ですから、末法の時代に入ったら、現世ではなく死後の来世に期待を
 して、日頃から良い行いを積みかさねようと、天皇家や貴族は盛んにお寺を建てたり、仏
 像を造ったり、仏教絵画を造る、そういう時代になりました。したがって、末法の時

浄土教と彫刻

代の到来の頃を境に、阿弥陀如来をお寺の本尊に据えてお寺を建てる、お堂を造るなど、浄土教に関わる美術作品が増えるということになります。これが末法の時代の到来と浄土教美術の隆盛との関連です。

こうした浄土教美術の一つの典型が末法の時代に入ってすぐの一〇五三年(天喜元年)に造られた宇治の平等院鳳凰堂です。この建物ですが、手前に池があって、その奥に左右対称の建物が展開し、この建物の真ん中、中堂といわれる一番大きな建物の中に阿弥陀如来がいます。この建物は、実は先程から何回か話題にしましたが、當麻曼荼羅などに代表される『観無量寿経变相図』に描かれているモチーフの一部を実際に抜き出して、地上に極楽の楼閣を建てて、極楽の池を再現した、そういうものと位置づけることができます。手前に池があるのを浄土式庭園と呼んでいますが、これはまさに極楽浄土の池を意識して造ったということになります。これは平安時代を代表する大貴族藤原道長の長男藤原頼通が大変なお金を投じて、地上に極楽浄土を仮想的に再現したようなものということができます。だから、「極楽をいぶかしく思う人は、この宇治の御寺・平等院を敬え」と言われたというのは、まさにそういうことなんです。極楽を疑う人がこのお寺を見たら「本当にこんなものがあるんだ」と信じられるようになる。それほどまでに極楽浄土を意

識して造ったのが平等院鳳凰堂です。この建物の面白いところは、真ん中の中堂といわれる所しか建物としての実用的な機能がない点です。両端の部分は二階建てみたいになっていますが、この両側の上の部分は高さが低すぎて全く実用にはならず、単なる飾りです。真ん中の部分だけがお堂としての機能を持っているのです。何でそんな実用にならない部分が多いお堂を造ったのかというと、これはまさに極楽浄土の建物を実際に地上に再現しようとする意図で造ったからに他ならないということです。

中堂の中には阿弥陀如来が祀られています。この阿弥陀如来の手の構えですが、密教式の阿弥陀如来の定印の印相です。この平等院鳳凰堂はどういう点がこの時代を代表するのかというと、外観が極楽浄土の建物を意識して、池まで含めて極楽浄土の再現と考えて造ってあるということをお話しましたけれども、内部も極楽浄土に関わるモチーフ・題材で全部統一されているところです。しかも非常に豪華なものになっています。例えばこの仏壇、須弥壇しゆみだんとも言いますけれども、これは螺鈿装飾を凝らした華麗な仏壇です。

堂内の上方には小さい仏さんが取り付けられています。雲中供養菩薩といわれるのですが、極楽の空中を舞って、阿弥陀如来の徳を讃歎供養する菩薩が表されています。極楽の空中を舞っている姿を雲に乗った姿で表現し、建物の長押の上の方に取り付けてありま

浄土教と彫刻

す。極楽浄土の空中はまさにこういうふうになっていることを再現してあるということになります。

それから、堂内の扉や壁には、往生図や来迎図と呼ばれる、亡くなった人が阿弥陀如来によって救い取られる様子が描かれています。阿弥陀如来がお供の菩薩を連れて雲に乗って、遙か彼方、西方極楽浄土から我々の生きている世界へやってくる光景です。地上の建物には亡くなって横たわっている人や、それを看取っている人もいます。阿弥陀如来の眉間の白毫びやくごうから亡くなった人に光が届いており、それで亡くなった人が救われることが暗示されるわけです。また別の扉には、「還り来迎」と言って、阿弥陀如来を先頭にみんな向こう向きになって、亡くなった人の魂を救い取って極楽浄土に帰還する所が表されています。

天井の真ん中には豪華な天蓋という阿弥陀如来の傘に相当するものが吊り下げられています。天井には彩色文様が施されていて、要所には鏡が取り付けられています。鏡が光を反射して、明るい光がお堂の中をさらさらと照らすような工夫もされています。建物の中部の柱などは現在は茶色っぽくなっていますが、よく見ると全部に彩色文様があります。宝相華唐草という、仏教世界、極楽浄土に咲くという花をモチーフにした文様で全部埋め

つくしてあるのです。

本尊の阿弥陀如来坐像は、当時を代表する仏師・定朝じょうちようが造りました。定朝はこの当時の貴族から絶大な評価を得ていた人で、その仏像は「仏の本様」、つまり仏像のお手本であるとか、「尊容満月の如し」、つまりその尊い姿は満月のように欠けるところが無い完璧な姿であると、当時の貴族から評されたぐらいです。確かに大人しくて優しい仏さんです。顔の表情も上脛を半分閉じて非常に優しい表情で、全体に彫りも浅く、衣も流れるようにきれいで、身体のプロポーションも見事で、力みもない。こういうおとなしい仏像が当時好まれたのです。

平等院鳳凰堂は一〇五三年（天喜元年）に造られましたが、一〇五二年（永承七年）から末法に入るとされてますから、それを意識して造られたのは明かです。末法の時代に入ったけれども、このような平等院鳳凰堂を、「極楽とはかくあるべし」、こういう姿であるんだらうということを藤原頼通は拝んで、何とか極楽浄土に生まれ変わりたいと祈願したわけです。しかし、単に祈願するだけでは極楽往生は難しいとされるのは、先ほどの『往生要集』のところで述べたとおりで、普段から作善をしないといけない。だから出来るだけ贅をつくし、お堂、庭園、内部空間、装飾模様など、あらゆるものに考えられないくら

浄土教と彫刻

いのお金と手間を投じて造ったのがこの平等院鳳凰堂であると言えます。

最近の平等院鳳凰堂修理で分かったのは、例えば中堂の柱は朱塗りになっていることもわかりました。建築の彩色は塗る面積が広いので通常は安価なベンガラを使いますが、非常に高価な水銀朱という絵の具を惜しげもなく使っており、普通では考えられないくらい豪華な造りです。堂内の天蓋にしても、内側に螺鈿装飾を取り付けるといのは極めて豪華です。つまり、とんでもないお金を投じて造ったわけですが、そうすることによって、貴族たちは自分が亡くなった後、極楽に救われるんだということを期待しながら造営したのでしょう。

雲中供養菩薩というのは、こういう雲に乗った菩薩たちが、全部で五十体ほど、お堂の上の方に取り付けてありました。これは楽器を持ちたり、いろんなポーズをしています。これも元々は全身極彩色が施してあって、金箔を細く切って文様を表現する切金も施されています。中堂の屋根上の大棟両端上に取り付けてある鳳凰も、こうしたものを屋根の上に取り付けるのは他に例がありません。

このように非常に豪華な平等院鳳凰堂は、藤原頼通が、父、藤原道長の建てたお寺を意識して造ったということは間違いありません。藤原道長が建てた寺院は残念ながら現存し

ませんが、藤原道長の一生を物語にした『栄華物語』には道長が建てた法成寺というお寺のことが書いてあります。それによると、堂内の仏壇が大変華やかに螺鈿などで飾られるとか、扉には往生図・来迎図が描いてあるとか、平等院と同じ様な荘厳であったということがわかります。これは物語ですから事実を伝えているかどうかは慎重に判断しないといけないのですが、全くのでたらめを書いてあるわけではないと考えられますし、平等院を見ると、この当時の貴族とか天皇家が造ったお寺というのは、華やかで贅沢の限りをつくり、そのことが逆に極楽往生に繋がるんだという考え方で造られていたということが分かります。十一世紀に院政を始めたことでよく知られる白河法皇が亡くなった時には、法皇が生涯の間にどれだけお寺を建てて、どれだけ仏像を造らせたかということが貴族の日記に書き残されているくらい、どれだけ良い事を行ったかというのが話題になる、そういう時代だったと考えられています。貴族はお金があるからこういうことができるのです。ですから、とにかく、何とか、極楽に生まれ変わりたいということを考えて、出来る限りの贅沢をつくした仏教寺院の造営に励んでいたということが知られています。

こうした平安時代後期の仏教美術のまた別の例として『九体阿弥陀如来』を紹介しておきたいと思います。京都府の浄瑠璃寺に九体阿弥陀如来が残されています。九体の阿弥陀

浄土教と彫刻

如来像を一堂に安置するというものです。何で九体なのか？ これは先ほど當麻曼陀羅のところでも述べましたように、人は生前の行いの善し悪しで往生の仕方が上品上生から下品下生までの九段階あるとお経に書かれていることに基づきます。その九段階のどこに入るかは阿弥陀如来が決め自分では決められないわけですから、自分がどの段階でも良いから、とにかくその九段階の中に入って極楽往生したいと願い、阿弥陀如来像を上品上生から下品下生の九段階にあてて九体作ったのが九体阿弥陀如来です。藤原道長が一〇二〇年（寛仁四年）に造営した法成寺無量寿院が日本の歴史上最初の九体阿弥陀如来像だと考えられています。『栄華物語』によると、藤原道長は亡くなる時にこの九体阿弥陀如来像の前で、阿弥陀如来の手から糸を自分の手に引っ張ってそこで亡くなったと伝えられています。要するに、死んだ時に阿弥陀如来に救ってもらえるように糸で結んだのです。残念ながら、道長が建てた法成寺無量寿院九体阿弥陀堂は現存しません。記録によると九体阿弥陀如来像は、平安時代後期の十一世紀から十二世紀、さらに鎌倉時代始めにかけて平安京を中心に三〇作例ほどが知られています。が、残念ながらそれらはみんな失われ、唯一残っているのがこの浄瑠璃寺の九体阿弥陀如来像です。この九体阿弥陀如来を安置する浄瑠璃寺本堂は、手前に池があつてその奥、方角でいうと西の方向にお堂があり、これも平等

院鳳凰堂などと同じく極楽浄土の池を意識して造つてあるといえます。一方で、平等院鳳凰堂とは全く違った所も認められます。九体阿弥陀如来像を安置する本堂は内外ともに非常に簡素な作りで、軒下の組物も一番簡素なタイプで、内部は天井すら張っていません。扉絵とか柱の装飾文様も全く痕跡がない。平等院鳳凰堂があれだけ贅沢の限りをつくしているのと正反対で、非常に不思議です。以前に論文を書いたことがあります、この浄瑠璃寺は平安京から離れた、奈良に近い所です。当時、平安京の中で世俗にまみれた所で修行するのが嫌なお坊さんたちが多数暮らしていた場所が、この浄瑠璃寺の辺りだったらしいです。今でもそうしたお寺の遺跡が結構残っています。不思議なことに浄瑠璃寺以外の今は失われてしまった九体阿弥陀如来像はいろんな記録に出てくるのですが、浄瑠璃寺の九体阿弥陀如来像は浄瑠璃寺の記録以外にはどこにも全く出てこないのです。普通に考えたら、貴族が造らせたものであればどこかの記録に出てきて良いはずですし、建物も簡素なものになるはずがないわけです。ということは、おそらく、浄瑠璃寺近辺は熱心な浄土教のお坊さんや信者さんがたくさん住んでいた所だと考えられるのですが、そういう人たちがお金を出し合つて造つたお堂が浄瑠璃寺九体阿弥陀堂であろうと考えられるわけです。九体阿弥陀堂は記録によると、藤原道長が造つた法成寺無量寿院を初例として三

浄土教と彫刻

十ほど知られていますが、いずれも天皇家や大貴族が造ったものばかりなので、大規模でなおかつ内外ともに豪華だったことは間違いありません。つまり、道長や頼通があれほど華やかなものを造っているのですから、それより後に造る人はそれより簡素なものを造るはずがないわけです。こうして考えると、浄瑠璃寺九体阿弥陀如来像は、すごく特殊な例が残ったものと言えるでしょう。逆にこういうものを地元の熱心な信者さん、お坊さんたちが何とかお金を出し合って造ったということに非常に大きな意義があると思います。つまり、それだけ浄土教というものが貴族のみならずいろんな所に浸透してきていたということですね。浄瑠璃寺九体阿弥陀如来像の胎内には印仏・摺仏しゅうぶつと言って、紙に仏像の姿をスタンプで押したみたいなのが多数収められていたのですが、この摺仏・印仏は安くて大量に作れるので、貴族は普通作らないものです。貴族はそのようなことをせず、高いお金を出して納入品を作らせます。つまり、一番手軽な作善としての印仏・摺仏しゅうぶつが浄瑠璃寺では納入されているのです。縦五センチぐらいの仏様の姿がスタンプ状に紙に並べて押しあたる。そういうものが納入されていたということは、本当になけなしのお金で、何とかこの九体阿弥陀如来像に縁を結びたいと考えた人たちが、この仏像を造ったということを示すものだと考えられるわけです。ちなみに、あまり知られていませんが、大分県の臼杵の石

仏にも平安時代、十二世紀の九体阿弥陀如来像があります。浄瑠璃寺とこの白杵石仏が、平安時代まで遡る九体阿弥陀如来像の今残っている古い例ということになります。

他にも平安時代後期の浄土教の彫刻では、阿弥陀如来と二十五菩薩を全部彫刻で造ってしまったというものがあります。東山の泉涌寺の参道沿いにある即成院に伝えられていますが、元は伏見寺にあった仏像が移されたと伝えられています。この二十五菩薩像は、亡くなった人を迎えに極楽浄土から雲に乗ってやってくる二十五菩薩全部を彫刻で造ってしまったという非常に興味深い例です。画に描くなら簡単ですが、二十五体彫刻で造るのさすがに大変です。でもそれほどまでして、貴族たちは亡くなった時に極楽浄土に救い取ってもらいたいと考えていたということです。そのうちの観音菩薩像は両手で亡くなった人の魂を載せる蓮台を捧げ持ち、別の菩薩は楽器を奏でながら、斜め上を向いて口を開けています。

亡くなった人を迎えにやってくる来迎に焦点を当てた仏像も造られました。一一四八年（久安四年）に造られた京都大原・三千院の阿弥陀三尊像がその代表です。中央が阿弥陀如来、向かって右が観音菩薩、向かって左が勢至菩薩です。この阿弥陀如来像は今まで見てきたのとは違って、右手を上げて左手を下ろして、親指と人差し指で環を造る、来迎印

浄土教と彫刻

という印相になっています。これは亡くなった人を迎えにやってくる時の印相とされるものです。また観音菩薩、勢至菩薩の坐り方に特徴があります。いわゆる正座をしているみたいだと言われる時がありますが、それは正確ではなくて、ひざまずいた所です。亡くなった人の元に辿り着いて、観音菩薩が手に持っている蓮台を捧げ出して亡くなった人の魂をまさに救い取ろうとしている所です。ですから、立った姿勢から膝を曲げて、ひざまずいた瞬間の、少し腰を浮かせて前傾姿勢になった所です。それから、このような阿弥陀三尊に加えて、地藏菩薩と龍樹菩薩を加えた五尊像という、非常に特殊なものもあります。

この阿弥陀三尊の来迎の姿が、次の鎌倉時代でも造られます。鎌倉時代はじめの兵庫県・浄土寺の阿弥陀三尊像を紹介します。これは東大寺が平安時代の終わりに平重衡の焼き討ちにあって焼けた時に、再建に尽力した重源が指導して造らせたものです。高さが五メートルほどもある大きな木造の阿弥陀如来像です。面白いのは、日本の一般的な阿弥陀如来とは両手の上げ下げが逆であるところです。真宗でも本尊として安置する日本の来迎印の阿弥陀如来立像は、右手を上げて左手を下ろしている姿です。なぜ浄土寺像がこれと左右逆の手の構えになっているかと言うと、中国で描かれた阿弥陀如来の姿をお手本にしたからです。中国からは当時、日宋貿易で様々な美術工芸品が日本にもたらされたのです

が、たとえばこの時代に中国・南宋で描かれた知恩院阿弥陀浄土図中の阿弥陀如来の姿と浄土寺像は同じです。しかし、この姿の阿弥陀三尊はそれほど多くありません。

鎌倉時代の最も典型的な阿弥陀三尊像は、同じく快慶が造った高野山・光台院阿弥陀三尊像です。これは日本の阿弥陀三尊像の一つの決定版と言える姿です。真ん中が阿弥陀如来で、左右に膝を少し曲げて前傾姿勢になり、亡くなった人のもとに近づく姿の観音菩薩と勢至菩薩。観音菩薩は亡くなった人の魂を載せる蓮台をささげ持ち、勢至菩薩は合掌します。この三尊像で興味深いのは、金色を強調した荘厳です。阿弥陀三尊の衣の表面は、金粉を膠で溶いた金の絵の具みたいなものを塗った金泥塗で仕上げ、さらにその上に切金という金箔の文様を現しています。金に金を重ねて表面を飾っているのです。光背も非常に豪華で全部に金メッキをほどこして、光をまばゆく放つかのように造ってあります。これは何を意味するのかということですが、この三尊像全体で、光を象徴しているのではないかという説があります。阿弥陀はサンスクリット語のアミターバあるいはアマターユスの音写ですが、意識すると無量寿如来あるいは無量光如来になるわけです。このうち、無量光、つまり計り知れない光の徳であまねく照らす仏である、阿弥陀如来を意識して造ったものではないかという指摘があります。このタイプの阿弥陀如来像が現在

浄土教と彫刻

日本では非常に多いです。浄土宗のご本尊もそうですし、浄土真宗のご本尊はこの三尊から阿弥陀如来像を抜き出した形式に準じます。この像のように装飾が多いものすべて「光」に結びついていくのは、平安時代の平等院鳳凰堂のように贅を尽くして、何とかして極楽浄土に生まれ変わりたいということを祈願して造ったのとはまた別のレベルに達していて、阿弥陀如来像が「光」を象徴するものだという意識で造られている可能性があるということが指摘をされているのです。それはとても意義が深く、ちょうどこの光台院阿弥陀三尊像が造られたのが一二二一年（承久三年）で、親鸞聖人がまさに生きていらったかった時代です。ですから、鎌倉時代に入り、法然上人や親鸞聖人による新しい浄土教の教えが人々に広まり、それまでの作善によってしか人々が救われない、お金持ちしか救われない、一般庶民は関係ない貴族仏教と違って、あらゆる人が救われることを説いた法然上人、親鸞聖人の時代と、新しいタイプの阿弥陀如来像が出てきた時代が一致するといふのは非常に興味深いということです。いろんな美術・工芸に贅沢を尽くして祈願するのではなくて、仏さん自体をまさに象徴的な存在として拝んでいくというのは、浄土真宗の本尊は「木像より絵像、絵像より名号の方が良い」とされているのと相通する所があるのではないかと私は思っています。ですから、鎌倉時代以降は、先ほどの平安時代の豪華な

阿弥陀如来像は急激に数が減ってきて、シンプルな阿弥陀如来像が多くなってくると言えると思います。

ちょうど時間になりました。あまりまとまりのない話でしたが、一応、日本の阿弥陀如来像に関して飛鳥時代から鎌倉時代まで、どのような像が造られて、どういう背景があるのかみたいなことをお話したつもりです。お聞き苦しい声で本当に申し訳なかつたです。どうもありがとうございます。

——二〇一三年一月二九日——